

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05080

研究課題名(和文) 外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラムの洗練

研究課題名(英文) Refinement of an outpatient nurse training program for practice by utilizing the independence of outpatients with cancer

研究代表者

佐藤 まゆみ (Sato, Mayumi)

順天堂大学・医療看護学研究科・教授

研究者番号：10251191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、先行研究において開発した「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム」の有用性を評価し、施設内での活用可能性が高まるようプログラムの洗練を図ることである。4つのがん診療連携拠点病院でプログラムを試行し、学修者、直接指導者、教育担当看護管理者へのインタビュー調査等を実施した。分析の結果、改善が必要な点はあるものの、このプログラムは、外来通院がん患者の主体性を育み活かす看護実践のための能力を育成する上で有用と考えられた。しかし、施設内で活用されるためには、教育の質は維持しつつ最小の負担で実施できるようにプログラムを簡素化する必要があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん医療の現場が外来に移行している今日、外来看護師の能力開発は重要な課題であるが、外来がん看護の能力開発に特化した育成プログラムは少ない。開発した「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム」の有用性が明らかになったことは学術的意義をもつといえる。本プログラムは、“がんを抱えても自分はこのように生活したい”という患者の意思を大切に、その実現に向けて患者が様々な問題に取り組むことを支援できる外来看護師を育成する。分析の結果、施設内での活用には簡素化が必要であったが、人々の生活や価値観が多様化している中、本プログラムは人々のQOL向上に大きく貢献できるといえる。

研究成果の概要(英文)：A purpose of this study was to evaluate the usefulness of "outpatient nurse training program for practice by utilizing the independence of outpatients with cancer", developed in previous studies and to refine the program to increase availability within the facility. The program was implemented in four designated cancer hospitals, after that, interview survey was conducted for learner, clinical instructor, and nursing administrator in charge of education. As a result of the analysis, although there were some points that need to be improved, this program was considered to be useful in developing the ability for nursing practice by utilizing the independence of outpatients with cancer. However, it was suggested that the program should be simplified so that it can be implemented with minimum effort while maintaining the quality of education in order to be utilized in the facility.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん看護 外来看護 主体性 外来看護師 育成プログラム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、外来に通院しながら治療を継続し療養生活を送るがん患者が増加している。がん患者が、がん治療や在宅療養を続けながらその人らしく生活するためには、がん罹患したことからの派生する様々な問題に対し、自分のありたい姿を見だし、それに向かって問題解決に取り組むこと、即ち、主体性を発揮することが重要である。そして、外来がん看護分野の看護師には、患者が主体性を発揮して療養生活を送ることができるよう患者をエンパワメントする役割が求められている。しかし、外来がん看護の現場には様々な問題があり、患者が行う問題解決のための自己学習をうまく支援できない、患者の対処能力向上のための支援をうまく実施できないなど、外来看護師が患者の主体的な療養を必ずしも充分には支援できていない現状が明らかにされている。外来看護師が、外来の場で、がん患者が主体性を発揮して自分らしく生活することを効果的に支援できるようにするためには、そういった実践力を獲得することのできる教育プログラムが必要である。

そこで研究者らは、外来通院がん患者 395 名及びがん診療連携拠点病院の外来看護師 598 名を対象として質問紙調査を実施し、外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な5つの能力を明らかにした。そしてこの結果から、「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム」を開発した(表)。開発した育成プログラムが現任教育の中で活用されるためには、プログラムの有用性及び活用可能性を高める必要がある。

表 外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム

1. 目的	外来通院がん患者が主体性を発揮して問題解決に取り組み、自分らしく生活を送ることを支援することができる外来看護師を育成する。
2. 学修者	外来勤務2年目程度の看護師
3. 構成と活用方法	プログラムは教育内容ごとに5つのサブプログラム(以下SP)から構成される。プログラムは、外来看護師が必要な内容を効率よく学習できるようモジュール方式とする。まず「実践力チェックリスト」を活用し自己の実践力の状況を評価し、学習するSPを選定して学習する。学習後は再度同チェックリストを活用して評価する。学習方法は、講義、演習(ロールプレイ、事例検討等)、所属外来における実習(指導者のシャドーイング、看護実践、指導者との振り返り等)である。指導者は、外来師長、がん看護専門看護師等である。
4. 学修目標	SP1:療養上の問題に対する患者の考えや思いを把握しありのままの理解できる。SP2:療養上の問題を解決する方法を患者が獲得できるよう支援し、問題解決に取り組む意欲を高めることができる。SP3:がん治療に伴って生じる副作用と自宅での対処方法を患者の個別性に配慮してわかりやすく説明できる。SP4:外来診察において患者が医師から必要な情報を得ることを支援することができる。SP5:外来において他職種と連携し外来通院するがん患者の問題解決を支援できる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム」の有用性を評価し、施設内での活用可能性が高まるようプログラムの洗練を図ることである。

### 3. 研究の方法

#### (1)プログラム内容の妥当性及びプログラム実施上の課題の明確化

対象：がん診療連携拠点病院の外来看護管理者及び外来看護師の教育担当者。

データ収集方法：開発した育成プログラムを郵送し、この育成プログラムの内容は外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践力を育成するという点から妥当であるか、また、この育成プログラムを所属施設で実施するときの困難・課題は何か、という2つの観点から通読するよう依

頼した。5名程度からなるグループを編成し、グループインタビューを実施した。グループインタビューでは、プログラムの「目的・対象者」「構成と活用方法」「5つのSP」のそれぞれについて、プログラム内容の妥当性及び実施上の困難・課題について意見を求めた。

分析方法：得られたデータは質的記述的に分析した。

倫理的配慮：研究は、研究代表者が所属する施設の研究倫理委員会の承認を得て行った。

#### (2) 育成プログラムの修正

上記(1)の結果に基づき、育成プログラムを修正した。

#### (3) 育成プログラムの施行と評価

対象：対象者1は、がん診療連携拠点病院の外来看護師で、自分の所属する部署で外来看護がひととおり実践できるレベルの者(外来勤務2年目程度)。対象者2は、対象者1の直接指導者。対象者3は、対象者1の所属する施設において外来看護師の教育に責任をもつ看護管理者。

データ収集方法：対象者2及び対象者3と共に施設での本プログラムの具体的な運用方法を検討した後、対象者2によりプログラムを実施してもらった。プログラムが終了した時点で、対象者1には個別インタビューを、対象者2及び対象者3には施設ごとに個別インタビューあるいはグループインタビューを実施した。インタビュー時間は1回30分程度とした。主な調査内容は以下のとおりであった。対象者1(学修者)：プログラムの効果・良い点及びやりづらい点等。対象者2(直接指導者)及び対象者3(教育担当管理者)：プログラムの運用のしやすさ及び運用のしにくさ、効果及び臨床での適用可能性等。また、対象者1(学修者)が記録した実践力チェックリスト(プログラム実施前と実施後)及び実践記録用紙を収集し、分析資料とした。

分析方法：インタビューデータは質的記述的に分析し、実践力チェックリストはプログラム実施前後の点数の変化を算出した。

倫理的配慮：研究は、研究代表者が所属する施設の研究倫理委員会及びプログラムを実施する研究協力施設の研究倫理委員会の承認を得て行った。

### 4. 研究成果

#### (1) プログラム内容の妥当性及びプログラム実施上の課題の明確化

6つのがん診療連携拠点病院に所属する外来看護管理者及び外来看護師の教育担当者計11名から協力が得られた。11名全員が外来看護師の教育を担当し、11名中8名は外来看護管理者であった。11名を5名と6名の2グループに編成し、グループインタビューを行った結果、以下の結果が得られた。

プログラムの目的・学修者：得られたデータは「学修者の条件は経験年数ではなく実践力のレベルで表記する」の1つにまとめられた。プログラムの構成と活用方法：得られたデータは「運用のイメージがわからない」「プログラム内容が主体性を育み活かすこととどのように結びつくのかわかりやすく記述する」「SPの前に自宅療養中の患者の特徴や外来看護の役割について学べる内容を加える」「指導者が適切に指導できるようマニュアルが必要」等18の内容にまとめられた。サブプログラム：得られたデータは、SP1では「ロールプレイは患者役だけではなく看護師役もやってみるとよい」等6つの内容に、SP2・SP3では「意欲をもてない患者にはまず看護師主導ですすめるとい部分の実施が難しいのでもっと詳しく記述する」等6つの内容に、SP4では「医師からの情報提供支援は病院による違いが大きいので自分の施設の状況にあわせて実施することを強調する」等3つの内容に、SP5では「他職種連携は外来診療の間をめぐって行うので簡潔明瞭なコミュニケーション方法の学修を加える」等7つの内容に、それぞれまとめられた。

#### (2) 育成プログラムの修正

上記(1)の調査の結果、プログラムに加えるべき内容、より強調すべき内容、表記方法、運用上の工夫等、プログラム内容の妥当性及びプログラムの活用可能性を高めるための課題が明らかになった。特に、外来看護師に特化したプログラムは少ないため、プログラムの運用方法は詳細に記述する必要があることが明らかになった。また、プログラムの内容が主体性の育成・活用とどのように関係するのか、どこに位置づけるかを明確に記述する必要があることが明らかになった。さらに、外来勤務2年目の看護師を対象としているため、外来通院がん患者の特徴や外来看護の特徴をプログラムの基礎として位置づけることや目的にそった指導ができるよう指導者マニュアルを作成することの必要性も明確になった。これらを踏まえて育成プログラムの修正を行った。

### (3)育成プログラムの試行と評価

4つのがん診療連携拠点病院に所属する、対象者1(学修者)計9名、対象者2(直接指導者)計9名、対象者3(教育担当管理者)計5名から協力が得られた。

#### 対象者1

「プログラムを受講しようと思った理由」は「患者主体のセルフケア支援ができるよう外来看護を深めたいから」「臨床指導者や上司から参加を提案されたから」等であった。

「選択したSP」は、SP1のみ：1名、SP2のみ5名、SP3のみ：1名、SP2とSP3：2名であり、SP4とSP5を選択した者はいなかった。「SPを選択した理由」は「サブプログラムにある実践力を獲得したいから」「実践力チェックリストの点数が低かったから」「負担なく効果的に学ぶことができるから」であった。一方、「SPを選択しなかった理由」は「SP1は選択したサブプログラムで関連して学ぶことができるから」「SP3,4,5は日常業務のなかで学ぶことができるから」「SP4は自分に関わる機会がない内容であるから」「SP5は内容に不足を感じるから」「すべて選択したかったが時間が限られるから」であった。

「サブプログラムの評価」は次のとおりである。「学修目標・到達目標は適切か」は、「レベル、内容、目標ともに適切である」「評価しやすくなるように分かりやすい表現に改善する必要がある」であった。「指導者は適切か」は、「専門看護師や認定看護師であることは心強く専門的知識を有しているので助言が的確」「専門看護師や認定看護師でなくても外来経験が豊富で実力があれば指導者として適切」等であった。「講義は適切か」は、「わかりやすく必要な内容である」「30分3回の講義は適切だが90分講義は時間確保が難しく理解も追いつかない」等であった。「研修は適切か」は「講義内容とロールプレイが連動しているため実践に活かせる」「研修前の情報収集、研修後の記録は時間がかかり負担である」等であった。「実践は適切か」は「実践や記録によりこれまでの患者への関わり方の不足部分に気づく」「シャドーイングは指導者の言葉遣いや声かけ、患者理解やアセスメント方法を観察でき実践に役立てられる」「指導者・学修者ともに多忙でシャドーイングの実施は困難である」「記録を通した振り返りで学びを深め、自己のかかわりの意味を理解することができる」「記録は時間がかかる」等であった。

「プログラム前後でチェックリストを使って実践力を評価すること」については「自分の能力の変化を客観的に評価できるので良い」「自分を客観的に評価することは難しい」であった。

「プログラムを受講した結果、獲得したいと思ったものが獲得できたか」では、10名は「獲得できた」であったが、1名は「自分の弱いと思う所を強化したという満足感はない」であった。また、「このプログラムを受講することにより、外来看護師は、患者の主体性を育み、それを活かして患者の問題解決を支援できるようになると思うか」は、「記録を使い実践について指導を受けられる体制があれば獲得できると思う」「プログラム全体を行うことで力を獲得できると思う」であった。一方、「プログラムについて改善が必要と思う点」は、「勤務時間内に行うためにプ

プログラムを短縮して欲しい」「すべてのサブプログラムを併行しておこなえとよい」「プログラム全体の用語や基準、内容の理解が難しい」「外来での人員配置がうまくできればよい」であった。

実践力チェックリストにおける点数の変化は、対象者が実施したのべ 11 の SP のうち 10 の SP (90.9%) で点数増加が見られた。また、プログラム全体の点数では、対象者全員の合計点数が増加した。

対象者 2 および対象者 3

「患者の主体性を育み、それを活かして患者の問題解決を支援できる外来看護師を育成するという点からみて、このプログラムの内容は適切か」について「必要な内容が網羅されており適切」「長期的評価が必要なので判断できない」「受講前後のチェックリストの点数が変わらないので内容の改変が望ましい」等であった。

また、施設での運用の可能性については、「病院のラダーと兼ね合わせれば可能」「できるところから取り入れることは可能」「育児短時間勤務の看護師や外来に異動してきた看護師にも活用できる」「シャドーイングは人員の確保が難しい」「部署の外来看護師や指導者の勤務調整や業務調整が必要」「指導者の育成や確保が必要」「プログラムの内容をもう少し簡素化する必要がある」「学修者の看護経験をふまえて行える方法がよい」等であった。

(4)開発した「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のため外来看護師育成プログラム」の有用性及び活用可能性

以上の分析の結果、改善が必要な点はあるものの、このプログラムは、外来通院がん患者の主体性を育み活かす看護実践のための能力を育成する上で有用と考えられた。しかし、施設内で活用されるためには、教育の質は維持しつつ最小の負担で実施できるようにプログラムを簡素化する必要があることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤まゆみ、片岡純、森本悦子、大内美穂子、塩原由美子、阿部恭子、高山京子、佐藤禮子
2. 発表標題 外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム：プログラムの妥当性を高めるための課題
3. 学会等名 第20回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高山 京子  (Takayama Kyoko)  (30461172)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師   (22501)	平成29年4月17日。研究分担者に追加。
研究分担者	大内 美穂子  (Ouchi Mihoko)  (30614507)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教   (22501)	
研究分担者	森本 悦子  (Morimoto Etsuko)  (60305670)	高知県立大学・看護学部・教授   (26401)	
研究分担者	片岡 純  (Kataoka Jun)  (70259307)	愛知県立大学・看護学部・教授   (23901)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西脇 可織 (Nishiwaki Kaori) (70757690)	愛知県立大学・看護学部・助教  (23901)	平成28年10月5日。研究分担者に追加。
研究分担者	佐藤 禮子 (Sato Reiko) (90132240)	東京通信大学・人間福祉学部・教授  (32826)	
研究分担者	阿部 恭子 (Abe Kyoko) (00400820)	千葉大学・看護学研究科・その他  (12501)	平成29年4月17日。研究分担者から削除。
研究分担者	塩原 由美子 (Shiobara Yumiko) (20555297)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師  (22501)	平成29年4月17日。研究分担者から削除。